

「東本願寺寛政度再建絵伝」とその背景

青木 馨

写真削除

東本願寺寛政度再建絵伝(同朋大学仏教文化研究所所蔵)

本稿は、このほど同朋大学仏教文化研究所が購入した「東本願寺寛政度再建絵伝」(仮称)を紹介しつつ、焼失により繰返された東本願寺再建について若干の考察を加えるものである。

まず箱書に、「本願寺第八世中興慧燈大師之行蹟画二軸 七十二翁雲岡書」とあるが、幸い札銘があり、それにより東本願寺の天明大火焼失、寛政度再建(第一回焼失再建)にかかる絵伝であることが判明した。そして同朋大学仏教文化研究所報第十八号にも、更概を紹介した。¹⁾

まず材質・法量は、絹本着色(第一幅一六三・六センチ×八七・三センチ、第二幅一六三・二センチ×八七・〇センチ)、一幅目は八段全二十一場面、二幅目は七段全十七場面を下から上へ展開し、描法もこの手のものとし

ては優秀で中央作と考えられる。表具の傷みが大きかったため、表装替をほどこしたのが本紙部分は良好な状態で復元された。

以下各場面の札銘を記してみたい(I…一幅目、①…一段目、A…各絵相順、()は備考)。

I—①—A 洛東出火并御本廟類焼(天明八・一・晦)

①—B 御堂退去

①—C 大谷御入興

②—A 山科御転興

②—B 大谷御帰興附 御教化

③—A 東殿御移住(宝庫と共に焼け残る)

③—B 仮堂御運送(八尾大信寺より)

④—A 仮堂御教化

④—B 堂跡御悲嘆

④—C 御再建御書(寛政元・五・二八)

⑤—A 諸国御小屋

⑤—B 新始御儀式(寛政元・三・二八)

⑤—C 御地築始^付(寛政二・三・一二)

⑥—A 関東御下向

⑥—B 越中川下御用舟

⑥—C 御門跡御病床

⑦—A 御追加御書紐解(寛政四・正月)

II—①—A 御参内(寛政五・二・一四)

①—B 遠山御材木^附怪事

①—C 遠山開路^附

②—A 御材木伐出

②—B 御本堂上棟(寛政十・三・二三)

③—A 大門御新始(寛政十・五・六)

③—B 遠州大灘

④—A 御遷仏(寛政十・四・二)

④—B 大門柱立儀式(寛政十二・三・二六)

⑤—A 摂受院御逝去(達性十七才・寛政一二・五・九、寛政九・八

尾大信寺為任職入寺)

⑤—B 河内御下向

⑤—C 御台御逝去(達如室門純院)

⑤—D 御葬式(寛政一二・五・二四)

⑥—A 大門供養会(享和元・三・一六)

⑥—B 諸国御影頂戴

⑦—A 閣上三尊於余間御開帳

⑦—B 御参内

以上のようなのであるが、おそらく何らかの絵解き台本が存在したと考えられるが、今のところそれに類するものを見出し得ない。

絵相を概観してみると、天明八年(一七八八)正月晦日、天明大火と言われる洛中大火により東本願寺も全山焼失する。そして門主らは大谷から山科へ一旦避難するが、大谷へ戻り東殿(積殻御殿)に居を移し、いち早く再建の陣頭に立った。

まず仮堂として、八尾大信寺御坊の本堂を移築しつつ、翌寛政元年五月二十八日に再建御書の紐解(発布)がある。これと相前後して全国の門末が、国や地域ごとに「御小屋」を境内に建て作業に取りかかった。絵伝では次に新始御儀式を描くが、再建御書の二カ月前の三月二十八日に行われており、一年後の同二年三月十二日に御影堂の地築が始められた。次の関東御下向・越中川下御用舟については不明瞭であるが、前者は幕府が飛驒の用材を寄附したことに對する礼のために、乗如が下向したものと考えられる。後者も用材に關係することであろうか。

やがて乗如は病床の身となり、再度追加御書を出し翌月の寛政四年二月二十二日に四十九才で没する。葬儀を経て法嗣光養磨が十三才で得度し達如となり、後継門主として大僧正に勅許され参内する。

次に信州遠山における用材伐出にかかわる場面が描かれるが、これについては後にふれるように、三河・遠江門徒が深く関わり、寛政度再建

の用材の約六割がここから調達されている。続いて絵伝は、御影堂でなく本堂(阿弥陀堂)の上棟・御遷仏と大門の新始や柱立式を描く。

これらの工事の最終局面で、達如の弟撰受院達性が十七才で寛政十二年五月九日に没し、引き続き達如室円純院も没する。これらの凶事を超えて、翌享和元年三月十六日に大門落成の供養会が勤められ、一連の諸堂宇の再建の区切となった。ここに、關係した門徒の希望により、落成を見ずに病没した前住乗如(歡喜光院)の御影が授与された。これについても後述するが、この御影は後世に至るまで大きな意義を有するものであった。

十年余の再建事業を終えて達如は参内してこの絵伝は終わるが、これは門主の動静を中心に一部信州遠山での用材伐出の様相も含め、中央本山を中心とした再建絵伝というものであり、焼失から再建に至る二代の門主と、ここに結集する門末の懇念と偉業を顕彰するという、あまり例を見ない特殊な絵伝といえる。

二

東本願寺は、近世後半の七十六年間に四回の焼失を繰り返し、その都度ほぼ全伽藍の再建の難事を遂げている。それらの年次を御影堂・阿弥陀堂についてみれば、以下のようである。

第一回 天明八年(一七八八)一月三十日類焼焼失

新始 寛政元年三月二十八日(御影堂)^(一七六九)

御影堂落成 寛政九年三月十日^(一七九七)

阿弥陀堂落成 寛政十年三月二十三日

第二回 文政六年十一月十五日焼失^(一八三四)

新始 文政十一年六月二十八日(御影堂)

御影堂落成 天保六年三月^(一八五五)

阿弥陀堂落成 同年三月

第三回 安政五年六月四日類焼焼失^(一八五八)

新始 安政六年十月十一日(阿堂)

御影堂落成 万延元年八月四日(遷座)^(一八六〇)

阿弥陀堂落成 同年同月同日(遷仏)

第四回 元治元年七月二十日^(一八六四)

新始 明治十三年十月(阿堂)^(一八八〇)

御影堂落成 明治二十八年四月

阿弥陀堂落成 同年

これによって知られるように、寛政度再建から二十五年で二回目の焼失となり、七年の作事で文政度の再建成就した。そして二十三年で三回目の焼失となったが、この時は二年八カ月後に宗祖親鸞の六百回御遠忌をひかえており、二年二カ月で阿堂を落成し諸堂宇も整備された。仮堂的堂宇であったといわれるが、規模は前後のものと変わらぬ本格的堂宇であった。

さらに四年後、禁門の変による洛中大火によりまたも四回目の焼失の憂き目に遇う。幕府の援助もあり、慶応三年(一八六七)再建の発示が出るも、倒幕・維新政府成立、神仏分離・廃仏の風潮などの社会的混乱により、ようやく明治十二年(一八七九)再び再建の発示が出され、翌年から十五年の歳月をかけ同二十八年に阿堂は落成した。そして諸堂宇全伽藍の整備は、明治四十四年(一九一一)宗祖親鸞六百五十回御遠忌の直前までかかっている。

尚、西本願寺は堀川の西側に位置しているため、洛中の大火においては免れており、寛永十三年(一六三六)建立の御影堂、宝永十年(一七六〇)建立の阿弥陀堂、近世初頭の御殿類を今に伝えており、焼失による造営という歴史を持たず対照的である。

本願寺は、紀州鷲森以後豊臣秀吉庇護のもとに、京都移転をはたしている。その後分裂し東本願寺は徳川家康庇護のもと、現在地に寺地を確保され現在に至っている。しかしながら、こうした権力者庇護のもとにありながら、寺領を所有しておらず、経済基盤の中心は数多くの門徒、すなわち人的基盤ともいべきものであった。これは、蓮如以来顕著となる「如来・聖人」(阿弥陀如来・宗祖親鸞)への報謝観念を背景とする懇志を、その中核とするものである。

近世本願寺教団は、こうした在り方が体制的に整備され、在家における仏事にあがる「内仏散銭」に象徴されるように、様々な懇志金から、寺院・在家の下付物である諸申物の礼金、寺院・僧侶にかかわる位階等

の諸免許の礼金や懇志に至るまで、本山に収納されていくシステムをとった。

こうした中で、東本願寺の再建事業は一部幕府からの用材提供があったものの、金銭はもちろんのこと、資材調達・夫役提供など、大半は本願寺教団独特の門徒の懇志にもとずく、全国規模の巨大プロジェクトであったと言える。それらの事例は、本絵伝の一部に見られる他、次節にあげる史料にその具体的様相が知られる。

このように、東本願寺の造営は、勸進僧などによる全国行脚の募財勸進の形をとらず、権力者もほとんどかかわることなく、土地経営を基盤としない、門徒の宗教的情念によって成就させた本来的ではあるが、極めて特異な形態で遂行されたものといえよう。

次に、第一回の焼失再建である寛政度の再建について、史料にもとずいてその実態の一部を見ておきたい。

三

東本願寺の四度に及ぶ再建造営関係史料は、図絵等を含めて数多く伝来する。ただそれらは、建築に直接携わった人が書き残したものが大半で、地方門徒の動向について書き記されたものは、僅少である。その点、次の二史料は、本山以外の場所で門徒を主体として書かれており、殊更重要である。

〔東本願寺寛政度再建絵伝〕とその背景

a 〔三河大谷派記録一〕(以下 a 本とする)

これは、旧称暮戸会所・現称大谷派暮戸教会(岡崎市暮戸町)に伝わる三河門徒の公式記録ともいふべきものである。暮戸会所は、天明大火による東本願寺焼失に伴い、三河門徒団の協議機関として設置されたもので、設置の経緯から寛政度再建の財的・人的協力についての詳細が書き綴られる。以後濃淡はあるが、一応昭和四十年頃まで書き続けられている。

この寛政再建の部分は、僧俗一体となって再建支援体制が敷かれ、信州遠山の深山の用材伐り出しについて多くの丁数を費やしている。

この史料をもとに、近時遠山佳治氏は三河門徒の寛政度再建における動向を考察される。その特徴は、三河三カ寺を中心とする本末組織ではなく、会所を中核とする僧俗の組織化や支援体制により推進されたことに注目される。²⁾

b 〔金剛一統志一〕(以下 b 本とする)

これは大坂の商人門徒大津屋庄兵衛が、用材等調達のための全国の門徒の動向や造営の様子など、かなり詳細に筆記した見聞録ともいふべきものである。殊に多数の挿画や、かなり高度とも思える建築の図絵も添付されており、文字史料だけでなく風景や絵画史料としても良質史料である。

筆者については不明瞭であるが、享和元年(一八〇一)弥生中旬に全五

冊の筆記が完了したようで、子孫に伝えられた。そして平成五年に翻刻自家出版されている。³⁾

絵伝は、本山中心に描いているため寺内の造作の進展と門主の動向を示す場面が多い。そして進度の展開からの主な場面は次のようになろう。

- ・ 跡片付け I-④-B
- ・ 仮堂移築 I-③-B
- ・ 地築 I-⑤-C
- ・ 造作 II-②-B、I-③-A、I-④-B
- ・ 法要 II-⑥-A
- ・ 募財 a本・b本
- ・ 門徒動員 a本・b本

このうち二史料に見られるのはb本において、地築と法要であるが、地築は絵入りで紹介している(下図)。これを見ると、幟旗を立てた地域はほぼ全国的に見られ、伯耆・丹波・伊賀・信州法中・松前同行など、必ずしも門徒地域でない所や遠隔のものも見られる。このことは、本願寺再建が全国の門徒の均質な価値観のもとに、共通な責任課題となっていることを裏付ける。

一方、門徒の動きを三点に絞ってみると次のようになろう。

- ・ 全国規模の用材伐出し a本・b本 II-①-B、I-①-C

これらはa本・b本いずれにも関係記事が見出せるが、寛政度再建の



写真削除

- 真り御願下 御地築大坂
- 飯御殿 御地築江戸浅草御坊講中
- 松前同行 御地築馬前御坊同行
- 丹波加州金沢御坊 御地築越後三条同行
- 御地築大坂講中 肥後
- 御地築大和 御地築大坂講中
- 御地築豊後 御地築三州一八日同行
- 御地築三州一八日同行 奥州
- 御地築長州同行 御地築三州一八日同行
- 御地築出羽 御地築伊勢国
- 河州八尾 御地築伊勢国
- 御地築京都 御地築京都
- 御地築地面 石ヲ切格算上へ
- 能登 大石上チ砂持築也
- 尾州 さしも広キ御地築二
- 御地築 人集リし事申及シ
- 近江講中 がたし
- 筑後御川 筑後久留米
- 九州 京大坂ヨリ雲ヲ上ル
- 勢州桑名 御地築但馬
- 尾州中本郡 御地築但馬
- 伊賀 御地築落陽
- 御地築中 御地築大坂
- 御地築法中 御地築三州講中
- 宮内國岩船門法中 丹波國
- 下總廿八日 御地築津高田
- 飛騨高山御坊 御地築越前
- 御地築越前 御地築越前
- 御地築参河 御地築新講中

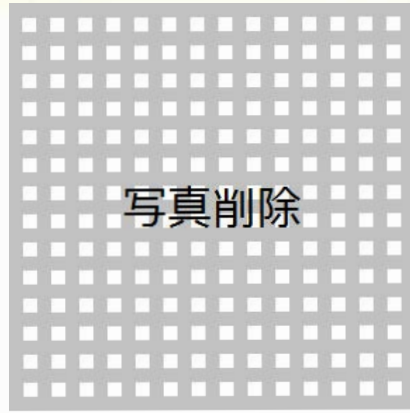
地築場面(『金剛一統志』上)

最大の用材伐出は、三河・遠州門徒による信州遠山の伐出しであった。絵伝にもこの場面が見られ、特に「怪事」として大蛇の頭や胴体を、大鋸や斧で切っている場面は興味深い。これは用材探索の際巨大な大蛇に遭遇したもので、b本の「七 信州遠山の岳々へ入」において以下の記事と関係すると思われる。

「今席此座に列、遠三両国の同行ハ、法の為に一命をなげ打大材を求と、存念日夜にたゆる事なき人々なれ共、遠山と聞し計、往古より于今人倫たへたる深山にて、獵人だに入得し事を不聞、道筋定かならずと聞ハ、宿りハ元より食事等二及これなき深山とかや、水の手も如何有らん、且ハ異形ノ者住侍るらんと……」「一命に掛けて深山へ分ケ入、たとへ鬼神の住所異形魔境の有とても……」

「異形」「鬼神」「魔形」という言葉が示すものが、大蛇の出現と一定の共通性を想定させる。ただa本にも直接大蛇にかかわ

「東本願寺寛政度再建絵伝」とその背景



写真削除

「怪事」(東本願寺寛政度再建絵伝Ⅱ一①一B)



写真削除



写真削除

うはばみ退治の場面(「遠山奇談」)

る記事は見られないが、こうした勇敢な事件が中央に伝えられ語られたと考えられる。

そしてそれを裏付けるように、『遠山奇談』にこの話が収載され、挿画も絵伝とほぼ同様であることが知られた。⁵⁾ すなわち同書第十九章「東澤山にてうはばみとた、かひつゝに退治たる事」によれば次のようである。

いよいよ大木の伐出しのため、柚日雇たちが組々に分かれたうちの柚頭小左衛門以下十六人が、東澤山上の小屋に宿った時のことであつた。一人が夜中便事に小屋口に出ると、「何やら行あたりころばぬ斗のさま、しかもなまぐさし。」と驚いて小左衛門に告げたが、驚くこともなく「是は蟒なるべしとさとり」、皆々に告げた。十六人が斧を手に声を合図に切つて出ると、「皆々装束してかけ聲一同に斬たてければ、さしもの蝮蛇もたまりかね、身もだへしけるに、小屋はいづくへかはねちらしぬ。首の方の二人は命限に働しが、つゝにうちとめたり。」

『遠山奇談』は遠州浜松齡松寺の僧らが、巨木探索と確認のため信州遠山の深山において遭遇した、数々の不思議な事柄を書き留めたもので、所々に挿画もあり、大変興味深い著作で、寛政十年に京都の華箋堂より出版されている。おそらくこれにより、一般大衆にも東本願寺再建の辛苦が伝わり、巷間でも話題にのぼつたと考えられる。

一方b本には、遠山材木にかかわる詳細な金銭的な記録もあり、参考までに引用しておきたい。

「寛政元年酉二月も山入

一、信州下伊奈郡遠山御材木御伐出^三付、^三当国へ御頼被為有候^三付、御世話方申上、法中元方肝煎方処々^ニ会所を立、詰役致し多分人数入、御材木伐おし川下り、夫より天竜川も遠州掛塚湊へ出し、大船^三積送申候事、

右入用金左之通、

一、金三万六千四百貳拾兩^{七拾年申}
内 金壹万五千五百六拾六兩

貳分貳朱卜

錢七百廿三文

右者報謝講納、御柱志納、諸代、物払代、御会所御見廻志、別段御再建志、両会所内仏散錢^メ末^ニ右訳記置、

内

金貳万七百兩、御上も御下り金

引残り不足方、三通丸与申材木船引当也、

これによると、遠山材木伐出の総費用は三六、四二〇兩で、そのうち三河門徒の報謝講(後述)などの募財額が一五、五〇〇余兩で、二〇、七〇〇兩は本山より拠出され、木材船三通丸も引当てられたとする。

またa本には、撰北(北撰津池田伊丹の間)神田明神の神木についての興味深い記事を載せる。⁶⁾ 二本の檜の大木が神木であったため、門徒の懇願と神罰を恐れる村方の苦慮の末、一本を門徒が二百兩で買得し、社

殿造営の資にすることで決着したようである。もともと大材のない地域の門徒が、大材寄進への並々ならない懇念が、神木をも伐らしむることで結実したものとして、極めて注目すべき事例である。

次に募財について、先の三河門徒の報謝講という仏事を通した募財の様相を、a本に沿って見てみたい。

「一、御類焼二付、当国一同法中同行相談之上、御再建為御助成一錢講と名附、一日壹文、講之積り、耆人前一ヶ月三拾文、或ハ六拾文・百文・貳百文宛、毎月三日報謝講大集会、十ヶ年之間相勸可申、相談定り候、(中略)一、一錢講ト云シヲ報謝講ト改名ノコトハ、子ノ十月赤坂正法寺ヨリ始り候、」

こうして寛政三年(一七九二)正月よりほぼ毎月一回、同十二年十二月まで十カ年に亘り一二三カ寺で、一錢講、後に報謝講が開催され、総額五、九五五兩一分二朱と錢六四七貫が集められた。これは、僧侶と門徒が一体化しつつ、聴聞を通してまさに「報謝」を具現化したものと言えよう。

一方、金銭の寄進の出来ない女人が自身の黒髪を献ずる記事が、b本に見られる。

「扱々此度の御再建ハ、私共へのねむりを覚せとの御催促なりけるに依て、弥々火宅の有様定かならざる娑婆界と存、一大事の往生是成りにてうたがひはれ、往生治定と思究る信の一念に、かゝる浅間敷悪道ならで、行べき方なき此者をお不思議の故、此儘ながら御助ケに預り奉

る身の、せめて身分相応、何なり共御ほうしやに備たしと、前後を見かへれ共身をふさぎし物計、殊に見やづかひの身の贈(貯)へなく、我身さへ自由ならざる浅間しやと、心身をもミ悔ミ入ル有様こそ、しゆしやうにも不便なり、や、有ツて鋏を捨、跡より追付て迎りなる家へ入てはさみをかり、両僧のまへにて立ながら、長なる黒髪おしげもなく根よりはさミ切、我物とてハ是計り、上方にてハ少しなれ共あたへに成り候よし、何とぞ御再建の志に御請取下さるべしとさし出シけれハ、(以下略)。」

越後三条御坊輪番の目の前で、貯えなき女人が髪を切つて御再懇志に差し出した逸話である。その後も三条御坊へ夥しく持たらされたため、本山に尋ねたところ、「上様厚キ思召候へハ、粗略にハ取払がたく、尤何等の御入用方ハ是なしといへ共、懇志の上より差上たる品なれば、易意に売代二なしなどハ勿体なし、綱となして牛引を揚る時、御役に立なバ門末の懇志もたんぬべし」との返答であり、綱にして本山に送られたという。

これが毛綱の始まりのようで、明治再建の毛綱の一部が現存しており、東本願寺再建造営の伝統になったと考えられる。本山だけでなく、例えば名古屋御坊の再建造営(文政十二年建立)時にも、境内に「毛綱所」が見られ、こうした動きは全国的に波及したようである。

次に門徒動員について例示してみたい。すなわち、造営事業の資材や資金調達に加えて、造営に直接関わる人的動員がどのようであったか

あるが、絵伝Ⅰ―⑤―ⅠAには「諸国御小屋」の段が見られる。

これは諸国門徒の境内における労役の拠点でもあるが、当然そこは礼拝・聞法の場でもあった。^⑤ b本によれば最終的には四十余ヶ国の御小屋が軒を並べたようである。そして「今諸国より出たる人は、身を忘れ^(たせじなまされ)、抽^ひテ丹誠、報謝の思ヒの外に他事なし、加^へ之御普請庭上^う諸^{もろく}の山^{やま}谷ク、木石の為に命を失ひし輩、始終を勤^ん合^あうれば^は百五十人^に及び^びと言^う云、古^{いにしへ}へ野田石山の亀鑑にもおさく替りなく、末世^{すこよみ}ニ至^{いた}つて頗^おる奇特は増長セリ、」^⑥とあり、報謝の懇念による全国門徒の働きと、二五〇余人の落命者の姿は石山合戦の再現であるかの評価を加える。

一方、a本でも三河の手伝人数の数字等が、天明八年から七年間(以後不明)記載される。これは本山に上山した数であるかは不明であるが、飯米等賄費も計上されている。それらを人数に限って見れば次のようである。

天明八年戊申三月ヨリ同極月迄当国御手伝

人数壹万八百九拾八人 御手伝

^(寛政元年)
酉年一ヶ年分

一、人数貳万四千九百四人 御手伝

^(寛政二年)
戌年一ヶ年分

一、人数貳万六千八百七拾四人 御手伝

^(寛政三年)
亥年一ヶ年分

一、人数貳万九千六拾貳人 御手伝

^(寛政四年)
子年一ヶ年分

一、人数貳万六百五拾四人 御手伝

^(寛政五年)
丑年一ヶ年分

一、人数壹万九千百貳拾四人 御手伝

^(寛政六年)
寅年壹ヶ年分

一、人数壹万八千百貳拾七人 御手伝

このように、毎年二万人前後の動員数が見られるが、全国的に見れば少なくともこの十倍以上の動員があったと考えても大過ないであろう。

以上のように、絵伝に必ずしも表現されていない部分のごく一部を史料に徴して見ただけでも、巨大な数字とエネルギー、深い信仰の姿を検出することが出来る。こうした造営を約一世紀の間に四度も繰り返すという、日本仏教史上例を見ない東本願寺の再建事業をどのように理解すべきであろうか、あらためて次に検討してみたい。

四

本山本願寺の諸堂宇を一瞬にして失ない、悲歎にあえぎつつ焼土の中から再建の動きとなる転換は、門主乗如の消息披露であり、このことが全門徒の結集の軸になったと考えられる。絵伝Ⅰ―④―ⅠCに「御再建御書」、Ⅰ―⑦―ⅠAに「御追加御書紐解」と二度にわたり発布される。殊に前者は大変な長文に及び、紙幅の都合でその主要部分を抄出して示し

とおきたい。

「抑、この本廟ハ、第十二世教上人いまの地に結構したまひてよりこのかた……然るに、ときなるかなく、天明第八の春、天災洛陽を焚焼するのきさみ、火勢もともさかんにしてつゝに当山も回祿にかゝり、巍々たる大堂も壮麗たる殿宇も、のこらすひと、きのけふりとなりて、曠々たるやけ野にた、かはらのちりみたれたるはかりなり、こゝにをいて、仏日も地にをち、法滅のときもきたるかたあやしまれて悲歎むねにせまり、雨涙たもとをうるほせり、それにつき予か不肖の身のうへにをいて、つねく聖人の素意に違せんことををそれみおもふところに、このたひの災禍にあへること、前業の所感とはいひなから、かミハ仏祖代々の瞑慮に對し、しもハ門葉の悲歎に對し、進退につきみちをうしなへるありさまなり、……さてあるへきにあらされハ、かりの御影堂になさんかために、河内のくに八尾の御堂をひきのほせて（I—③—B）……いくほともあらざるに、かりの両堂かたのことく成就して、真影をうつしたてまつり、御正忌の御仏事も昔年よりの流例のことく、一七箇日の勤行退転なく法義相続さふらふこと、これひとへに門葉の精力により、またすなはち仏祖の冥助にあらずや、……」

「……ねかハくハ、群參のともからをしてあまねく法義を聴聞せしめんことを欲す、これによりて造営のこゝろさし、いよく切なり、……しかれはすなハち、一流にその名をかけたる道俗、如来大悲の恩徳を念し、予か当今の微意をくみえて、まつ他力の信心を獲得して懇念のまこ

とより、自他一味のこゝろさしをはけまし、一同の助成によりて、すみやかに再建成就さふらふやうにと、ひとへにたのミおもふことにてさふらふ、（以下略）¹⁰⁾」

消息は寛政元年五月二十八日の日付で發布されており、記録の上では新始が二ヵ月程早いのが、こうして全国の門末は再建造営に向けてそれぞれの動きを始めた。しかしながら作事は順調に進められたが、この四年後、門主乗如の病状が悪化したようので、寛政四年正月に再度のいわば遺言とも言ふべき「御再建御追加御書」が披露された。これも抄出しておきたい。

「かさねて筆をそめさふらふ、去ぬる寛政のはじめ、右のことくおもふあらましを短毫にあらはし、來集の門末へ月ごとにつけきかしめ侍りに、かねて厚信の門葉、信心堅固のこゝろさしより、いやましに報謝のまことをぬきんて、日々夜々出精他事なきことにさふらふ、これによりて、再建のいとないよくす、ミ、周囲の構等も追々出来におよへり、……予もすてに年齢知命にをよひて、病惱よりく形体を犯すにあへり、かれこれもてこゝろいそかる、ことにさふらふ、よりて前文にしるせるかことく、あハれはやく真影を新堂にうつしたてまつり、報謝の経営をいたさんことを欲す、このことのみ念願昼夜不断におもふはかりなり、（以下略）¹¹⁾」

翌月二月二十二日乗如は没することになるが、この消息も先の消息同様、使僧により全国にもたらされ末端まで浸透せしめた。ここに乗如の

願いは遺志となり、むしろ拡大して門末に受容されたものと考えられる。

これにより、門末の懇念に一層の拍車がかかったことは想像に難くない。

近世の門主消息のうちでも、乗如・達如期のものには、各地の末刹(後の別院)の焼失や老朽化による再建に関するものが、比較的多く見られる。すなわち再建等の催促や督励の内容が中心であるが、これにより門徒団は確呼たる結果軸を得たといえよう。すなわちこれらの消息の意義は、門主からの督励がそのまま開山親鸞よりの督励であり、そのまま開山親鸞への報謝行でもあったと見てよい。

こうしたあり方は、石山戦争時の顕如、その末期の教如による抱擁における、懇志・馳走の要請や兵糧・玉薬の支援要請に近似する。つまり門主の消息や御書が、一揆的結束を近世においても可能にしたものと見ることが出来る。

石山戦争終結と共に、本願寺教団の闘争的エネルギーは表面的には収束した。それは中世社会の終えんと近世社会への転換という、社会的環境の変ぼうの上にその理解の中心がおかれる。ただ本願寺の門徒団が減少したものでなく、組織的にも幕藩体制社会に組み込まれるが、本末組織や講組織などは大きな打撃を受けたとは考えられない。加えて、天正から慶長期にかけて門徒の移住による新田開発等が各地で見られ、¹² 経済基盤の拡大と、近世初頭から御書の発給が増加し講組織の拡充が全国的に見られるが、何よりも二つの本山の成立により門末が半分化したというより、互いに琢磨増大した面を考慮すべきであろう。

石山戦争等では「法敵」認定の手順が踏まれ、「護法」概念に向一揆的結束を見るならば、¹³ 本山本願寺焼失という平時における法城消滅は、無形の法敵による本願寺襲撃と同質の危機であったと見ることが出来る。武装と闘争において一向一揆の様相を見るならば、近世社会にそれを引き当てることは出来ないが、闘争をともしなない一揆的結束を想定することは出来ないであろうか。

金竜静氏は、一向一揆の信心の構造を身命の是非を超えた報謝に、戦時の教説が一揆時の消息に見られることを指摘される。¹⁴ もしそうであるならば、先に引用した「金剛一統志」の三・遠門徒の信州遠山用材探索に際し、「法の為に一命をなげ打大材を求と」行動に移した姿は、護法が身命に勝っている。あるいは「此度の再建ニ付てハ諸國より出る所の大材、皆不思議より出ざるハなし、但(且)ツ又御本山ハ何レヘ向しも未知らざる遠境の門末、おしなへて一命をなげ打打致たる有様、是ふしぎに不非」¹⁵と、本山を見たこともない遠隔の門徒もおしなべて「一命をなげ打つ」不措身命の姿と写った。

もともと「金剛一統志」の著者が、「身を忘れ丹誠に抽で、報謝の思ヒ」の中での落命者二百五十人は、石山(合戦)と同様であると評価することについて先にも注目したが、全国の門末の動向を情報収集し、大堂造営を目のあたりにした著者の見たものは、信仰が強靱なエネルギーに変化し、落命と救済が一体となった無数の姿であった。すなわち著者が伝え聞く、二百年前の「石山合戦」の門徒の姿でもあったのである。

このように考える時、近世社会においても平時での闘争をとまなわな
い「一向一揆」概念を想定することは、あながち荒唐無稽ではないと考
える。

むすびにかえて

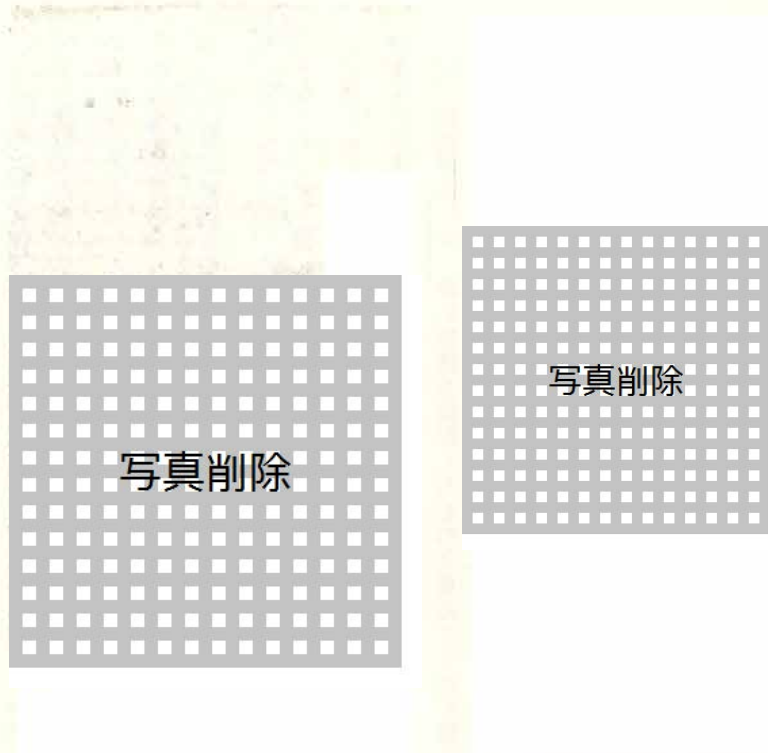
このような大事業が、わずか一世紀の間に四度も繰り返され、門徒の
疲弊による遅延が確認できないのは、単に報謝行を醸し出す信仰の強靱
さという面からだけでは、説明は不十分である。

この点についてまず考えられることは、『絵伝』の最終部分にもある
「諸国御影頂戴」(II-⑥-B)である。すなわち志半ばにして逝去した
前門主乗如(歎喜光院)の影像が門末に授与された意義は大きい。これは
やがて門末の間における巡回仏事として展開されることになる。

この巡回仏事については、すでに西山郷史氏や蒲池勢至氏らが民俗学
的視点で能登や近江の事例を紹介される¹⁶⁾。それらは「ゴソツキヨウ」
(ご崇敬)・「ゴオツネン」(ご越年)と呼び称され、当初より今に至る
迄伝承継続されるもので、西三河地方においても一部地域では、暮戸会
所へ下付された影像を貸り受け仏事が継続されている¹⁷⁾。

この時の御影のうち、尾張国愛知・海東・知多三郡門徒中に下付され
た影像には次のような裏書きを附す。

「東本願寺寛政度再建絵伝」とその背景



本願寺前大僧正釋達如(印)

歎喜光院真影

天明戊申之春、我本廟羅「祝融之災」、巍然「堂宇惣」為「烏有」、前住

愛知郡
尾張国海東郡

知多郡
門徒中

乗如(歎喜光院)真影

上人深^ク悲^シ歎^フ之^ヲ復興之企夙夜無^レ忘^ル衆縁之募旦暮不^レ懈^ラ而^{シテ}命^チ也未^レ幾^{ナリ}奄^ト惣^ト化去^ス矣^ハ於是^ニ我門徒若干追^レ憶^シ其思^ヲ而^{シテ}粉骨碎身^{シテ}盡^シ土木之功^ヲ策^ニ斧斤之力^ヲ僅^ニ十有餘年^{ニシテ}而殿堂門^ノ庶悉^ク復^ス旧觀^ニ嗚呼雖^モ是^レ法徳^一而亦^タ不^レ二人ノ功^{ナラ}乎^ハ是以^テ圖^ニ画^シ前住上人ノ真容^ヲ而^{シテ}以^テ授与^{スル}于門徒某等^ニ者也^ハ

于時享和元季辛酉四月五日⁽¹⁸⁾

(適宜返り点を付した)

これによれば、天明元年の春本廟は罹災し烏有に帰した。前住上人は深く悲歎し、日夜募財に励んだが志半ばで遷化した。門徒はこの遺志を継ぎ、粉骨碎身の工事により十年余りで、殿堂・門等旧觀に復した。これは人の功ではなく仏法の徳である。これにより、前住上人の真容(影)を圖画し門徒に授与するものである、という内容である。

こうして全国の主に門徒中に前住乗如の影像が下付されるが、装束は全て黒衣・墨袈裟で三河の場合、「御苦勞姿の御影」と称されることに、その意義が明示されている。そしてこの影像は、単に前住乗如や難事業を偲ぶことにとどまらず、仏法の殿堂を門主乗如以下の全門末が、仏法力により完成成就させたものであることを象徴したものである。

この影像を門徒間に巡回することにより、後世においても先人の懇念を共有することになり、再度・再々度の焼失に遭遇しても、この寛政度の再建のエネルギーが保持され続け、再現されたものと見ることが出来る。

加えて、歴史を遡る蓮如時代の吉崎坊舎災上や、山科本願寺回祿、対信長戦による大坂本願寺焼滅の悲歎を伝説的に語り継いだとしたならば、復興のエネルギーもそこに内包されていたと考えても誤りないであろう。

ただ、戦国期と近世という社会背景の決定的な相違が、その復興に如何なる影響をあたえたかであるが、前者の戦国期の焼失はいずれも以前の復興はなされない。そのため、近世の平和時の焼失・復興を戦国期のそれと単純に比較することは出来ないが、法城消滅という最大の危機において、全国の門末の動向を戦国期のそれと擦り合わせることは可能である。

すなわち、財・物・人の調達と動員が、門主の消息に呼応しつつ、そこには生命をも凌駕する価値観と責任観を見出すことが出来る。この法城焼失の危機克服が、「護法」に裏打ちされた報謝行の有り様であるならば、戦国期の一向一揆の性格を投影したものと見ることが可能となるであろう。

本稿は、東本願寺「寛政度再建絵伝」の考察をもとに、度重なる再建事業の意義についても若干の考察を試みたが、一向一揆という大きな論点にまでその視座が及び、不十分な問題提起となったが、大方の御批判をいただければ幸甚である。

本稿作成にあたり、同朋大学仏教文化研究所の御理解を得た。謝意を表したい。

註

- (1) 拙稿「東本願寺寛政度再建絵伝」について、同朋大学仏教文化研究所報第十八号(二〇〇五・三・三一)
- (2) 遠山佳治「江戸時代後期の本山再建に関する真宗門徒の考察―寛政期本山再建に関する三河門徒の活動を中心に―」(雑誌「信濃」第五七巻第一〇号・二〇〇五・一〇・二〇)
- (3) 「金剛一統志全」(一九九三・神戸守一発行―東海ブックス取扱―)
- (4) 「遠山奇談」は昭和十八年に山村書院(飯田市)より刊行されている。尚これについては同朋大学服部仁氏・渡辺信和氏の御教示を得た。
- (5) (3)六二頁。
- (6) (3)七一―七二頁。
- (7) 「名古屋別院史」通史編一九九頁に、「二十四輩巡拝図会」の参照図が示される。
- (8) 拙著(冊子)「矢作の真宗」(二〇〇四・三、真宗大谷派岡崎教区第十八組教化委員会)
- (9) (3)二〇四頁。
- (10) 「真宗史料集成」第六卷四九九頁。
- (11) (10)五二三頁。
- (12) 「史料に見る近江八坂善教寺史」にも近江から越後への移住が見られる。また、「別本如光弟子帳」にも、三河から遠州や越前北の庄への移住が見られる。
- (13) 金龍静「一向一揆論」三二八頁(二〇〇四・十二、吉川弘文館刊)。
- (14) (13)三二七頁。
- (15) (3)六八頁。
- (16) 西山郷史「蓮如と真宗行事」九一頁―能登の御影巡回―(一九九〇・木耳社刊)、蒲池勢至「真宗民俗の再発見」六三頁―能登の御崇教―、七〇頁―近江の乗如上人御越年―(二〇〇一、法蔵館刊)。
- (17) 岡崎市額田地域や豊田市南部地域では現在も大谷派暮戸教会の御影が貸し出される。
- (18) 「名古屋別院史」資料編。

〈補註〉

本稿成稿後、「大谷絵本古今校」なる一本を渡辺信和氏よりご教示いただいた。これは寛政七年に版行された大堂造営(新始・地築・大材伐出・運送・造作・上棟式など)を図絵で綴ったもので、実質東本願寺造営が下敷きとなったもので、興味深い一本である。